
放死者

赤ボールペン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放死者

【Nコード】

N0026Y

【作者名】

赤ボールペン

【あらすじ】

死を放つ者と書いて、放死者。放死者の仕事は、人間に死を与えること。人間に対し、何の感情も持たず、黙々と与えられた仕事を続ける放死者。放死者と共に仕事をする死神。人間界と対の世界となる魔界からやってきた悪魔、悪魔と人間の間に生まれてしまった悪魔の子……。自分たちの今まで持っていた「当たり前」は、当然のように、奪われていく。

プロローグ

放死者^{ほうししゃ}とは、字の通り、死を放つ者のこと。

人間に隠れ、ひっそりと生きている。

そんな放死者は、周りに人を近づけてはならない。別れを惜しんではならない。

僕は常に、人間に対し、無感情で居続けなければならない。

この役職のこの才能が花開いてしまったのだから、仕方ないと言えは仕方がない。

人間に永遠の別れを作る、この仕事。

放死者。

誰からも好かれることの無い、悲しい奴。

その悲しい奴らの中の一人が僕なのであって、僕は、その悲しい奴らの中の一人なのである。

第1話「当たり前前の恐怖」

目の前に、当たり前前のように広がっている世界。当たり前前に存在する人間。当たり前前のように立っている俺。

不思議に思ったことはないだろうか。

何故、自分がここに立っていて、人間という生き物が存在して、その人間がいる世界が当たり前前のように広がっているのか。

俺は柄にもなく、そういう小難しいことを考えてみる。

“当たり前”ということ……。

冒頭から一体何を書いているんだか。

自分で自分に呆れながら、当たり前前のように右手で鞆を持ち上げる。

「そついえば俺、左手では鞆持たないな」
どうでもいいか。

「行つてきまーす」

独り言のように玄関で呟き、家を出た。

「真^{しん}」

家から少し出たところで、幼馴染に声をかけられた。

佐藤悠斗^{さとうゆうと}。

彼は、同級生の男の子である。だが、本当に男子かと疑ってしまうくらい、彼は美少女顔である。

成績優秀、スポーツ万能の上、性格良好という完璧超人なので、男女共にこいつの支持率が高い。まったく、羨ましい奴だ。

「桜だね」

「あん？」

「ほら、桜だよ。そこにあるでしょ？」

悠斗が、一本の桜の木を指差す。

声変わりしたといっても、男子の中では高いほうで、見事なアルトボイスである。

「ああ、ホントだ。桜だな」

そう言うと、

「綺麗だね」

と笑った。

俺は正直、こいつのこの笑顔に弱い……と思う。

高校一年生から高校二年生へと無事進級。

クラス替えは成績純だから、あまりメンバーは変わらない。

俺もこいつも進級試験で同じくらいの点数だったから、今年も多分同じクラスだろう。あ、一夜漬けということは内緒で。

「見て見て真！ また一緒のクラスだよ！」

悠斗は、俺の隣で騒いでいる。何を分かりきったことを言ってるんだ。とは思いながらも、

「よかったな、一緒のクラスで」

「うん！」

この笑顔を見せられたら、そんな言葉返せるわけあるまい。

ニコニコと満面の笑みで足取りの軽い悠斗が、今にもスキップしそうな感じで俺の前を歩いていく。

「真！ 早く早く！」

振り返って笑う。

「ねえ！」

「はいはい」

しょうがないなと心の中で呟きながら、俺は走った。

当たり前の会話、当たり前のように広がっている世界、当たり前のように俺を呼ぶ幼馴染のところへと駆ける俺、当たり前に散る桜、当たり前に立つ校舎、当たり前の……。

当たり前の、日常。その反対は、非日常。誰も、非日常は望まない。

当たり前前に包まれた日常。当たり前前の日常を当たり前のように繰り返す当たり前前の日常。当たり前前と日常は関連していて、それも当たり前前で、その事実も当たり前前で、日常で、もしかしたら、非日常も日常で当たり前前なのかもしれない。

人間はもう、「日常」という世界の中に、当たり前前のように溶け込んでしまっている。

だからその「日常」をパッと、誰かに奪われたとき、人間は動揺し、自分を忘れてしまうだろう。

俺が今目の前にしている当たり前前の光景は、実は一番、怖いものなのかもしれない。

桜は散る。

俺の前を、後ろを、周りをはらはらと、舞っては散っていった。

俺はそれを、ただ眺めていた。

第2話「転校生がやってきた」

「オラ、席に着けお前ら。HR始めるぞ」

「ウーッス」

新学期が始まり、約一週間。

担任は若い女の先生を望んでいたが、生憎の男。だが、これはこれで楽しい人だから、別に嫌いではない。

「今日は転校生紹介する」

と言った瞬間、辺りはすごい勢いでザワザワと雑談を始めた。

「静かにしろ。ホントにお前らは転校生好きだなあ」

担任はニシシと笑う。

俺は別に、転校生に興味は無いけど……。

「ねえ真、転校生ってどんな子なんだろうね、ね」

悠斗は転校生に興味津津のようだ。

たまたま後ろの席で、机に這い蹲^{つくは}るような感じで話しかけてきている。

「おい、入って来い」

先生が手招きをすると、一人の男子生徒が入ってきた。

周りが更に騒がしくなる。俺も、ソイツを見て少なからず、驚いた。だってソイツは、

「間宮^{まみや}シドウくんだ」

恐ろしいほど無表情で、その表情が見えないほど深く、フードを被っていた。おそらく私服だろう。

この学校は私服登校オツケーだ。一応制服は指定されているが、入学から一年経った今では、クラスメイトの三分の二ほどが制服に私服を組み合わせるといったスタイルである。俺は、百パーセント制服だけだ。

俺が驚いたのは服装ではなく、ソイツの左手が包帯で巻かれていたことだ。

何かを殴ったのか、傷があるのか、ファッションなのか、俺の頭の中で次々と包帯で巻かれてある理由が出てくる。そして、消えていく。

新学期が始まってまだ一週間なのに、前の学校から転校か……。しんどいな。

「それじゃあ間宮くん、みんなに一言」

「……」

そいつは、黙って頷いた。うなず

「え、あ……間宮？」

「……」

声をかける担任の目を、ソイツは見続ける。担任のほづが背が高いものだから、見上げる形だ。

「……え、あ、はい……よく、できました」

しばらく担任は奴と見詰め合っていたが、とうとう担任が負けてしまった。

「じゃあ間宮くん、君の席は後ろの空いている席だ。分かるだろう？」

担任は焦り口調で、にこやかな営業スマイルを振りまいた。

奴は何も言わず、後ろまで歩き、腰を下ろした。

「それじゃ、これでHR終わるぞ」

担任は、足早に教室を出て行ってしまった。

「ねえ真」

「ん？」

悠斗が後ろから話しかけてきている。俺はその声に反応して振り向く。

「変わった転校生だね」

「そうだな」

先ほどまではしゃいでいたのが嘘のように、悠斗の声は落ち着いてしまっている。テンション下がったか。

「アレ、なんだろうね」

悠斗が、そつとアイツの席を見る。

アレとは言うまでもない、奴の左手の包帯である。

「怪我かな？」

「さあ。ファッションなんじゃね？」

「そういうファッションある？」

「俺は知らないけど、一部地域で流行ってるのかさ」

「そうなのかなあ」

「そういうことにしとけよ」

「うーん……分かった」

悠斗はあつさりと俺の仮説を飲んでしまった。

俺だつてアイツの左手は気になるけど、初対面で左手のことを聞くわけにはいかないし。

それに、今あいつの周りにはもう女子の集りができている。流石にあの輪の中を割って入るうなんていう自殺行為はしようとは思わない。

他の男子も、女子の圧に負けてしまつて、転校生に興味はあるものの、近づけないでいる。

「ねえ真、あの間宮くんつて、どんな顔してるのかな？」

「さあな」

俺らの角度からでは、アイツの顔は見えなかった。

「もー真、今日超曖昧だよ。転校生のほうばかり見て。気になつてるの？」

「ん……まあ、それなりに」

「珍しいね。真が転校生に興味持つなんて」

「別に。どの転校生にも興味がないわけじゃないけど」

近づくのが、面倒なだけで。

「ふうん」

そこで、会話は途切れた。

外で咲いている桜は、今日も綺麗だった。もう大分散ってしまったけれど、まだ蕾のものもある。

俺は、散ってしまった桜の花びらにはさらさら興味はない。

俺は、咲いている、花開いている桜の花びらを見て、美しいと、
感じたのだ。

第3話「黙り続ける」

「……」

ああ、イライラする。

なぜ、どこの学校に行っても先生に自己紹介を求められるのか。先生が僕の名前を紹介してしまえば、僕は何も言うことがない。好きな食べ物でも言えっか。

僕が自己紹介をしてどうする？ 好きな食べ物を言ったところで、一体何があるというんだろう。誰が得するっていうんだよ。ただでさえ朝嫌いなのに、マジテンション下がる……。

僕も生前は、こんなだったのだろうか。

考えるとゾツとしてくる。嫌だなあ。僕がこんなにクドい生き物だったならば。

「ね、ねえ」

「……？」

一人の女子に話しかけられる。

どうやら僕は、知らない間に沢山の女子に囲まれていたようだ。

「間宮くんどこから来たの？」

「……」

どこから……。

いきなり難しい質問だなあと思いながら、僕はことごとく無視をする。

それに飽きて他に言ってくれればいいのに、女子は今もなお、僕に質問を続ける。

僕は何も答えない。

答えてやったほうが親切なのかもしれないが、僕は人間に対し、親切にするつもりはない。

質問の中には、立场上答えられないものもある。

答えられるものと答えられないものがあつたとき、人間は答えら

れないものに対し、凄く興味を示す。話したくなくても、いずれかは話さなければならなくなる。

ならば、何も話さなければいい。

僕という奴がどんな奴なのか、何月何日生まれで、出身地がどこで、今まで何をやってきたか、全てを秘密にしておけばいい。

そのうち相手が「コイツはこういう奴だ」と思つて去つてくれれば、僕としては好都合だ。

人間観察は、人間と少々離れた場所で行うのがいいからな。

僕はスツと席を立つ。

「え、とつと、間宮くん？」

歩いていく僕に声をかける人。

「どこ行くの？」

「……………便所」

僕はまた、歩き出す。

クラス内で初めて発した単語が「便所」というのが気に触るが、まあいつか。

「便所」という単語は便利だ。どの状況からでも僕を逃がしてくれる。

人ごみからも、授業からも、掃除からも逃げられる。ただ、仕事だけは僕を追いかけてくるけど……。

仕事だけは、逃げる僕を逃がさぬように、僕をずっと、追い続ける。仕事は生き物じゃないのにな。笑えてくるよ。

僕は、少し口角を上げてみる。腹の中からクツクツと笑いがこみ上げてくる。そして、笑みがこぼれ出してしまう前に、僕は口角を元に戻す。

無表情、無感情。

これが、僕が仕事をする上で僕が心に決めていることだ。

僕の仕事は、人間に死を与えること。言葉を変えれば、人間を殺すこと。

そして僕は、人間ではない。

上司^{うえ}から言われるとおりにただただ人間を殺していくだけの物体。ただの、人間の形をした物体なのである。

だから僕は、物らしく無表情、無感情でいなければならない。人間の前では。

時計の針がカチ、という音を立てながら動くのが分かる。もうそろそろ、教室に戻らなきゃな。

僕は、クルリと方向転換をして、今歩いてきた廊下を戻った。

最初くらいは、真面目に授業を受けておいたほうがいいだろう。

人間は怒りっぽいからな。初日から起こられるのは気が引ける。

「相変わらず、窮屈^{きうくつ}だな、人間界は……」

僕は呟^{ささや}き、教室に足を踏み入れた。

第4話「同業者」

休み時間になり、僕は再び、教室を出る。

みんなは楽しくランチタイムであり、僕もまた、昼食をとることにする。

校内に自動販売機があるというのは確認済みだ。僕は、中庭に設置された自販機へと向かう。

自販機の商品は、コーヒーを始め、コ。・コーラやイチゴミルクなどのジュースがある。一品90円という学生の財布に優しいものだ。その代わり、サイズが小さいみたいだけど。

僕は迷わず牛乳(170ml)を購入した。パッケージには「おいしい牛乳」と書いてある。牛乳なんておいしくなくてもそうでなくとも、腐ってなければいいんだけど。

会社の事務所からくすねてきた菓子パンと、先ほど購入したおいしい牛乳(170ml)を手に、僕は一人になれる場所を探して歩いていった。そのとき、

「おい、シドウ」

上から声がかかる。

「屋上誰もいないからさ、上がってこいよ」

独特なイントネーションで早口で、ソイツは言った。

おう、と軽く返事をして、僕は右足で地面を蹴る。

「え？」

教室や廊下がざわめいた気がした。動体視力のいい奴なんかは、僕の顔が見えていたのかもしれない。

僕は、地面に足を着く。

「おいおいシドウ、初日からそんなことやっちゃっていいのか？」

1階から5階の屋上まで飛んでくるなんて」

目の前にいるソイツは言う。

「かまわないよ。それに、いちいち階段なんか上ってたら面倒だ。

疲れるし」

僕は屋上の床の砂埃を足で払いのけ、座った。奴は、屋上のフェンスに腰掛けている。よくあんなところに座れるもんだ。

「疲れるって、お前まだ17だろ？」

「設定上な。もう何年17歳やってると思ってるんだ」

「……さあ？」

ああ、殴りてえ。この猫顔、ぶん殴りてえ。

「まあ、俺らは年取らないしねえ。ずーっと死んでしまった年齢で止まってるよね」

「老けて死ね」

「ええ？ シドウひどーい。てかもう死んでるし。死んだって言うてるし」

ソイツはサラッと言う。

そうだ。僕たちはもう死んでいる。だから他人に「死ね」など言われても、何とも思わない。死の恐怖など、僕やコイツにはない。持つ必要も無い。僕たちはもう、死の恐怖を味わったのだから。

僕は放死者で、

「シドウ？」

コイツは、人間の肉体と魂を別離させる存在。

——死神。

仮にも神で、こんな奴が神で、こんな奴でも神なのだ。こいつを神と呼んで崇め讃えていいのだろうか……。

「なんでもない」

僕は菓子パンの袋を開ける。

「どうだ？ 人間界は」

死神は僕に話しかける。

「相変わらず、窮屈だよ」

僕の、率直な感想だ。

「なんだ、いつもソレじゃないか」

「他にどんな感想があるって言うんだよ」

「担任が女だとか、クラスに可愛い女子がいるとか、先輩に胸キュンとか……」

「死ぬ女たらし。てか担任男だし」

「グハッ」

死神は胸を突かれたような表情でフェンスの上で器用にのた打ち回った。そしてその動きをピタリと止め、

「なあなあ、気になることはないのか？」

ガラリと雰囲気を変えてきた。

「ないよ」

「ないことはないだろ」

何かあっただろうか。

「あ……」

「どうした？」

気にかかることが一つ、あった。

「この学校、やたらと悪魔がいるぜ」

「悪魔が？」

死神は顔をしかめる。無理もない。悪魔は僕たちの敵だからな。

「そりゃ、悪魔くらいいるだろ」

「そうじゃなくて、数が多いんだよ。お前も分かるだろ」

今だって、悪魔がうようよ浮いている。

「まあ、ほとんどが雑魚だから、心配はしてないけど」

「そっか」

雑魚悪魔なら、僕らでも握り潰せば殺すことができる。雑魚ほど弱いものはない。

「それじゃ、僕は行くから」

空になった菓子パンの袋の中に、潰してしまった牛乳パックを入れ、僕は立った。

「あまり人間に近づくなよ、リュウ」

「お前も、あんま派手なことすんなよー」

死神の言葉は軽い。

リュウ。

死神の名前。会社から与えられた、たった一つの名。

僕は、リュウの本当の名前を知らない。僕のことさえも、僕は知らないのだ。

もう授業が始まる。

僕は、周りに浮く雑魚悪魔を握り潰す。

手を開くと、もうそこに悪魔はいなかった。

「……」

そのことにちょっとした快感を覚え、自分が放死者であることを、改めて覚えなおすのであった。

第5話「冷めた奴」

俺は、転校生に興味はない。というより、『転校生』という言葉に興味がない。

転校してこようがこまいが、俺が興味を持つのは、人間そのものである。

おもしろそうだと思えば興味を持つし、つまらないと思えば興味は持たない。ただそれだけの話だ。全ての転校生に『転校生』というだけで興味を持つ必要など無いのだ。

そんな俺を見て、他人は「冷めた奴^{ひと}」だと言う。

俺は、自分のことを「冷めた奴」だとは思わない。

現に今、一人の転校生に興味を持っているからである。少しばかり、普段より体が熱い。

間宮シドウ。

初日から私服で登校してきた変わった奴。必要最低限なことしか喋らないし、必要なことも、喋らないときがある。最初は興味を示していたクラスメイトも、今ではもう沈黙しか返ってこない質問タイムは終わりにしたらしい。

俺はアイツが楽しそうに笑っているところを見たことがない。怒るところも、悲しむところも、他人をバカにするとところも、何一つ、アイツの表情が変わるところを見たことがない。

「おい兼倉^{かねくら}」

今はずっと机に伏せて眠っている。

「兼倉」

朝からずっとだ。よく眠れるよな。

「兼倉！！」

「はい！」

立てと言われたわけでもないのに、俺は勢いよく立ち上がった。
「ボオーっとしてんじゃねえよ」

「あ、すみません」

クラスみんながクスクスと笑う。それに便乗するかのように、木の葉が力サ力サと音を立てた。なんか、全てのものに笑われた気分だ。気分悪。

俺は座り、再び視線を間宮に向けた。

なんだよ、笑ってもないし。起きる気配も感じられない。

「間宮あ」

先生が声をかける。

「……」

間宮が機嫌悪そうに、伏せていた頭を起こした。

「間宮、起きてたか？」

「……それなりに」

「じゃあ続きから読んでみる」

「はあ……」

間宮はいかにもダルそうに、立ち上がった。そして、

「しばらくして、その人はやっと……」

一通りそのページを読み終わり、これでいいですかと聞いているかのように、先生の顔を見る。

「お、おう、座れ。今度からは頭上げておけよ」

先生は、そう言うの間宮に背を向けて、教卓のほうへと戻っていた。

間宮は、先生に注意されたにもかかわらず、すぐに頭を伏せてしまった。なんとという神経の持ち主だ。

まったく、不思議な奴だ。

起きているはずがなかったのに、爆睡だったはずなのに、読んでしまうのだから。俺には、あいつがただ頭を伏せているようには見えなかった。

俺は、アイツに興味を持った。興味津々だ。

まだアイツのことを、俺は一切知らない。どこ中出身で、どこ高

からの転校生で、誕生日がいつで、血液型、身長、体重、性格も知らない。

もっと知りたい。アイツのこと。アイツの左手のことも知りたい。ヤバイ。胸が高鳴る。体が熱い。人間に対して、こんなに興味を示したのは、いつ以来だろう。もしかすると、初めてかもしれない。そういうところを見ると、俺は今まで「冷めた奴」だったのかもしれない。でも、今は違う。間宮シドウという人物について詳しく知りたい。そういう思いが、俺の中を駆け巡っている。

高鳴る胸を押さえつつ、俺は終業のチャイムと同時に、奴との接触を図った。

もう俺は、俺を抑えることができない。

風が、教室内を走った。まるで、俺に落ち着けと言うように。

第6話「感じた寒気」

俺は奴に興味津々だ。

いや、興味という領域を超えて、興奮に達していると思う。

アイツのことを知りたい。アイツの左手に、幽かに感じる妖気。アイツの左手に隠されたものを、知りたい。

興奮の領域を超え、もう欲望の域だな、これは。

そうは思っていない、こんな俺にブレーキはもうかけられない。

「な、なあ」

「……」

話しかけると、間宮はダルそうではあるものの、頭を起こしてくれた。そのとき俺は、初めて間宮の顔をじっくりと見た。

目にかかりそうなほど伸びたオレンジがかった前髪、ほんの少しだけ垂れて見える目、一の子に引つ張った薄い唇……。結構、整った顔立ちをしている。

「少し、話そうぜ」

「……」

間宮は、何も言わず、俺の顔を見てきた。話せ、ということだろうか。

「お前、誕生日は？」

まずは、無難なところから聞いていこう。

「……」

「おい」

「……」

「聞いてんのか？ お前」

「……」

いくら話しかけても、返ってくるのは沈黙ばかりだ。聞かれちゃ、まずいことだったのかな。そう思い、話題を変えてみる。

「じゃあお前、血液型は？」

「……」

しかし、返ってきたのはやはり沈黙。

なんか、他のやつらがコイツと会話することを断念していった理由がなんとなく分かる気がする。会話が全て、一方通行だ。会話にもなっていない。

「なんか喋れよ、お前」

「間宮シドウ」

「は？」

なんだよ、今更自己紹介か？ お前の名前なら、転校初日に担任から聞いた。

「僕にも名前がある」

ボソリと、彼は言った。

「なんだ、名前呼んで欲しいのか？」

「僕の名前は、お前じゃないからな」

間宮は、吐き捨てるように言った。

「それと」

「なんだよ」

「僕は、僕のことについては話さない。一言もだ」

「え、なんで」

「いずれ分かるよ。君はね」

そう言った瞬間、間宮シドウが笑った気がした。ニヤリ、と。俺の背筋がピリ、と冷えた気がした。

間宮シドウは立ち上がる。

「お、おい、どこ行くんだよ」

「便所」

「もう授業始まるぞ」

「分かってる」

間宮シドウは、教室から出て行った。

『いずれ分かるよ。君はね』

そう残された奴の言葉が、俺の頭の中でグルグルと回る。
風が吹いた。

俺の興奮は、一気に冷めてしまった。

俺が感じた冷たさは、彼の放った言葉だったのか、彼の不気味な笑みだったのか、突然吹いてきた風のせいなのか、俺には分からなかった。彼の言葉の意味すらも、俺は分かっていなかった。

「真」

「え？」

振り返ると、見慣れた顔がそこにあった。

間宮シドウは教室に帰ってきていたみたいだが、俺はもう一度話しかけようという気にはなれなかった。

「ねえ真、授業、始まっちゃうよ」

「あ……うん」

俺はまだ、戸惑いの色を隠せずにいた。

そのせいでまた授業に集中できず、先生に怒られたということは、言うまでもない。

第7話「自宅にて」

「はあ……」

大きく長い溜息をひとつ。

「どうした？ シドウ」

いきなり話しかけられたことに驚いて、体が跳ねた。

「なんだ、リュウか」

「なんだってなんだよ、なんだって」

リュウがドカッと僕の横に座る。

僕とリュウは、同じ家に住んでいる。内装はとてもスッキリしていて、机とソファーとテレビとたんすくらいしか家具は置いていない。どうせ、一年そこらで出て行ってしまう家だから、これでもいい。ちなみにこの家は、僕とリュウの所属するD・C・O・(Death Control Organization)という組織から与えられたものである。

「シドー？」

リュウは、返事をしない僕の顔を覗き込む。

「どうしたんだよー」

「別に」

「なんだよ、冷たいなあ」

リュウは少々早口だ。猫顔で、殴りたくなる顔。髪が長いからといって一つに束ねている。髪のボリュームは少ないので、チヨロンと八センチくらいの尻尾が垂れている感じ。髪が長いのが嫌なら、切るか縮めるかすればいいのに、どうやらあの髪型がお気に入りのようだ。

「ねえシドー」

「なんだよ」

「家の中ではこれ脱がない？」

リュウが俺が羽織っているコートをツンツン引っ張ってくる。

「脱がない」

「暑苦しいなあ」

ブーツと口を尖らせるリュウ。

「あとさあとさ」

「なんだよ」

「フードも取ろうよ、えいつ」

「あつ」

今まで被っていたフードをのけられてしまった。

僕が着ているコートはフードが付いた人間界ではあまり見かけないデザインだ。このコートもD・C・Oからの支給品である。フードが付いているのは、顔を見られたくないでしょ？ とのこと。

放死者と死神で色分けされているようで、僕は黒、リュウは灰色だ。

「眩しい……」

目を細めると、

「いつもフード被ってるからだよ。日の光に当たりなさい」

「ヤだよ」

僕は、再びフードを被った。

リュウは死神の癖に日の光が大好きだ。よく日向ぼっこしてるし、コートについているフードもあまり被らない。

「ねえシドー」

「んだよ、さつきから」

だんだんうつとうしくなってきた、つい言葉が荒くなる。

「学校どう？」

「あん？」

「だから、ガッコ」

僕が苛立っていることもお構いなしに、リュウは学校の話を持ってくる。

「どうもしねえよ。窮屈なだけだ」

「またそれだけえ？」

「それ以上何を話せつて言っただよ」

「かねくらしん
兼倉真」

「……」

兼倉真。

その名前を聞いたとき、僕は体を振るわせた。

「今日、お話してたでしょ？」

「なんで知ってるんだよ」

「んー、見てたから」

「そうか」

「で、どうだったの？」

「どうだった、か。」

正直、パツとしない。少量の妖気を感じ取っただけだ。ただの、人間。

「ただの人間に興味はない」

「そっか」

リュウは一息ついて、

「ホントに、ただの人間なのかな？ 兼倉くんは」

「と言い出した。」

「ただの人間だよ、あいつは。多少霊力持ってるって感じのさ」

「そっか」

僕が断言すると、リュウはそれ以上深入りしてこなかった。

兼倉真は、リュウだけでなく、僕も気にしていた奴の一人だった。なんとなく、人間より微妙に強い妖気を感じたから。

でも、そういう奴は人間界にもいるものだ。

僕は、兼倉もそういう類の奴だと思った。

『いずれ分かるよ。君はね』

あれは、成り行きで出てしまった言葉だった。きっと僕は、ああ言っておきながらも兼倉には話をしないだろう。自分の存在を、人間に知られてしまつては困るから。僕が存在することも、リュウが存在することも、D・C・O.が存在することも、人間界が全てこ

れらによって支配されていることも全て。
人間は、知ってちゃいけないんだ。その事実を。

第8話「家路」

家路に着くと、もう辺りは暗くなり始めていた。

部活には所属していないのだが、クラスで遊びすぎてしまった。

こんなに帰りが遅くなるなど、考えてもいなかった。

もともと、悠斗が図書室に行きたい、とか言うからこんなことになったんだ。悠斗が図書室からなかなか帰ってこないから、遊んでしまったのは俺だけだ。

「僕だけのせいじゃないからね、真」

「え？ あ、ああ、うん」

俺の考えていたことに相槌を打たれたので、驚いた。もしかしてこいつは、超能力とか使えるのだろうか……。

バカなことを考えるのはやめよう。だって俺、高校生だし。ガキじゃないし。形だけでも大人っぽくなっておきたい。

「それにしても真、間宮くんにとっても興味あるんだね。珍しい」

「珍しいか？」

「珍しいよ。だって、いつも自分から転校生とかには話しかけないじゃん」

「俺さ、転校生っていう響きには興味ないの。面白そうって思ったから近づいただけで」

「何度も言う。俺は、転校生には興味がない。興味があるのは、人そのものだ。」

「面白そうって、何が？」

「だってアイツ、授業中絶対寝てたのに、当てられたらちゃんと教科書読むんだぜ？ 今日の小テストも満点だったし」

面白い、というより、不思議に思ったのだ。

「でも、なんか冷めた」

「え、何で？」

あの言葉。「いずれ分かるよ。君はね」という、あの言葉のせい

だ。高ぶった熱は、その言葉から放たれた意味の分からない恐怖によって、冷めてしまった。

と、悠斗には言えないので、

「だってさ、アイツ喋らないし」

「……」

俺の率直な感想に悠斗はクスリと笑い、

「そうだね」

と言った。

「あ、じゃあ僕はここで」

十字路で悠斗は右を指差した。俺はこのまままっすぐ向かう。

「おう、またな」

「うん」

悠斗の小さな背中が遠ざかっていくのを見て、俺は再び家路に付いた。

見慣れた住宅街を、俺は何も思わずに歩く。歩き慣れた道を、慣れた足取りで歩く。そして、見慣れた一軒が目に入る。俺の家だ。

「ただいま」

誰もいるはずがないのに、俺は毎日玄関で「ただいま」と言う。習慣とは恐ろしいもので、やめようとは思っていても、なぜか言ってしまうのだ。

「ふう」

家に着いたという安心感から、息が漏れる。

荷物を自分の部屋に置こうと、階段を上ろうとした瞬間、

「おう、帰ったか」

「……は？」

この家には、俺しかない、はず。なんだけど、なんだか野太い声がある。

息を吞んで、後ろを振り返ると、そこにいたのは、

「なんだよ真。しばらくいなかったからって、俺のこと忘れたのか？ この野郎」

俺の引きつった顔を見てニヤニヤと笑う、俺の保護者だった。

第9話「オッサン」

「てか、何でいるんだよ」

麦茶が入ったコップをテーブルの上に置き、俺は保護者に問う。

「何でって、ここは俺の家だぞ？」

はかますがた

目の前に、足を組み、袴姿で煙草をふかしているオッサンは言う。
このオッサンは、年から年中袴姿だ。今この時代になってこの服装をこよなく愛すってどうなんだろう。

「確かにここはオッサンの家だけど、いつもは会社で生きてんじゃない」

「オッサン言うな。14しか離れてないだろうが」

「14も離れてりゃ十分だよ」

俺の思うオッサンと若者の境界線は、30だ。

「何で帰ってきたの？」

俺は、オッサンの吐く煙草の煙を手で払いのける。

「休みができたんだよ」

「珍しい。流石の悪魔も春眠暁を覚えずってか」

「お前、意味分かって言ってるのか？」

グサツ。

おや、何かが胸に突き刺さった気が。

「わ、分かってるに決まってるんじゃない。俺、これでも学生だぜ？」

「ははは、とその場を適当に流す。テスト前だけに勉強するのはやっぱダメか。」

オッサンのジト目が気になるところだが、話題を変えよう。

「それで、仕事のほうは落ち着いたんだ。でも父さんは？」

「ああ、親父はまだ社にいるよ。今日は番だしな。俺はたまたま非番だったから帰ってきただけ」

「なんだ、オッサンだけかよ」

父さんに少し、話したいことあったのに。

「なんだ、俺だけじゃ不満か？」

「別に」

重たい腰を上げ、席を立つ。

「やけに冷たいな……反抗期ってやつか？」

……違うと思う。

「どうだ？ ガッコは」

「は？」

せつかくドアの前まで来たのに、話しかけられた。

「だから、学校だよ。学校」

「あ、ああ、別に、変わりなく」

言いながら、ドアノブに手をかける。もうそろそろ、この人との会話も疲れてきた。

「悪魔に変わりは、ないか？」

「……」

その言葉に反応して、せつかくドアノブにかけた手を、引っ込めてしまった。

「見えてるんだろ、まだ。しかも、見える種類も増えてる」

「……」

体が、少し震えている。

「当たり前だろ」

オッサンが、煙草の火を消した。

オッサンの顔は、いつもとは違う、真面目な表情だった。

どう答えたらいいかわからず、床を見つめていると、

「今お前に見えてるのは下流階級悪魔（下流階級悪魔）だけだと思うが、油断は禁物だぞ」

「……分かってる」

「お前の身体（からだ）は、常に狙われてるんだからな」

「分かってるよ……」

だからと言って、何ができる。俺に、何ができるって言うんだ。

「お前の周りをうろついている雑魚を一匹ずつ祓ってたら、キリがな

いからな。できる限りのことはしてやるが……」

「うん、分かってるよ」

人間が、どうにかできる問題じゃないって。いくらオッサンが祓魔師でも、この問題はどうにもできない。俺から悪魔を引っぺがすなんて、誰にもできない。

だって俺は、

「どうしようもないのは分かってる。俺が……」

俺は……

「俺が、この人間界せかいに存在する限り……」

「真……」

「悪魔がここにいる限り」

俺は………悪魔だから。

上流階級悪魔と人間の間生まれた、悪魔の血が流れる子。

祓魔師のお偉いさんに言わせてみれば、「汚れた血」「汚れた存在」。

人間界で、生きていてはならない生物……。

俺は、ドアを開け、リビングを出た。外では雨が、降っていた。

第10話「仕事の時間」

「おい、シドウ」

「ん？」

リュウに肩を叩かれて、集中が途切れる。

「仕事だ」

リュウは、珍しく家の中でフードを装着していた。

「もう、そんな時間か」

携帯で現在の時刻を確認する。夜の十二時を回ったところだ。

「そんなに集中して、何やってたんだ？ シドー」

先程まですごく真面目な顔していたのに、喋ったらすぐ崩れる顔もつたないな。

「宿題だよ」

「学校の？」

「そ。学生さんは忙しいんだよ」

山ほどの宿題出しゃがって、あの先公。

「宿題ね。面倒くさいやつだったね、あれは」

「やったことあるのか？」

「ま、一応その年は生きてましたし」

「へえ」

なんという会話をしているのだろう。

というか、リュウって何歳だろう。何歳まで生きていたのだろう。

そこら辺、僕はリュウに詳しくないなと思う。

「それで、今日の仕事は？」

「ああ、これリストね」

「ん」

リュウが携帯を投げつけてくる。（ちなみに、リュウの携帯はスライド式。）

「平塚清汰36歳病死、長原光弘22歳事故死、島田キヌ89歳病

死……」

僕はリュウの携帯のディスプレイを見ながら、書かれてあることを読み上げる。

「今日は6人か」

「後は他の番隊に振り分けられたみたいだよ」

「そっか」

毎日毎日、仕事内容は違う。何人以上というノルマはない。ただ、与えられた仕事を黙々とこなすだけだ。

仕事は普通、チームで行う。その理由は、力のなさだ。やはり、人の命を奪っていくわけだから、それなりの力が必要となる。一人で行うには限界があるのだ。だからD・C・Oは番隊の制度を取っている。

番隊の制度とは、放死者一人と死神一人でペアになり、そのペアが三つ四つ集まって一つの団体となることだ。僕たちはこの団体のことを番隊と呼ぶ。

番隊がいくつあるのかは僕は知らない。D・C・Oに関する情報をD・C・Oから直接放死者に公開することはない。死神を通して放死者に情報は回ってくる。

いくら同じ組織に入っているとはいえ、放死者より死神のほうがくらいは上だ。どんなに死神が放死者より頼りなくても、バ力でも神は神なのである。上司は、そう決めているらしい。

「じゃ、行くぞ」

「はいはい」

僕とリュウは、グループにはならず、二人だけで行動する。僕がD・C・Oに連れていかれたときにはもう、そのように決まっていた。

番隊としては十三番隊に振り分けられているものの、集会等にも全く顔を出さないため、その存在はあまり知られてはいない。

「どこから行く？ シドウ」

「病院から」

「了解」

僕たちは、コートに身を包み、暗闇の中へ姿をくらました。

第11話「人の持つ花」

消灯時間をとくに過ぎている今、病院に灯りがついていることはなかった。よく見れば所々電気はついているものの、全体で見ると真っ暗だ。

ヒュウと、風が吹いた。いくら春とはいえ、まだ4月で、この時間帯だ。嘘でも「寒くない」とは言えない。シドウは、顔をしかめた。

「なんだよ、そんな怖い顔すんなって」

それを見たリュウが、シドウの肩をポンと叩いた。

「お前は寒くないのか？」

尋ねると、

「俺は寒さには耐性があつてね」

と、独特の喋り方で答えた。相変わらず、こいつは早口だ。こいつが喋ると、他人は聞き取れないのか、首を傾げることが多い。僕はなぜか、最初こいつと会って会話を交わしたときにそのようなことを思うことはなかった。むしろ、どこか懐かしい感じがしたくらいだ。

「さ、行くぞ」

「ああ」

短く返事をし、自動ドアから入った。自分の姿を消して。

僕らは死んでいるから、いろいろなことが実現可能となる。流石に時間のループは不可能だが、自分の姿を見せるか見せないかは、個々の自由だ。人間に放死者と死神の存在を知らなければそれでいいのだ。

ただし、姿を消すには多少負担がかかる。死神は神だから、それほど苦はないらしいが、僕にとっては相当な疲労量だ。だから昼間はああやって面倒くさい学校に行っているのである。

「ねえ、305号室の平塚さん、もう短いですって」

「え、そうなの？」

「元氣そうに見えるけど……」

「門山先生たちが話してるのを聞いたのよ」

看護師の会話が聞こえてくる。こんなところ、他人に聞かれたらどうするつもりなのだろう。というか、人間を看護する人間が、そんな会話をしているのいいのだろうか。

そういう疑問は持つても、僕には講義をする術すべがない。死んでい
るほうとしては、関係のないことだ。僕は自分に言い聞かせ、騒い
でいた喉の奥の奥の奥もやを打ち消した。

病院内を歩き、平塚清汰の病室を目の前にする。

毎日病院には訪れているのだが、やはり、何度来てもいい気分は
しないのだった。

きつい消毒液のにおい、恐ろしいほど真っ白な天井、壁、ドア、
床、ベッド……。そして、それとは反対に真っ暗な病室。

「さ、早く終わらせちゃおうぜ」

「分かってる」

僕は、左手に巻いてある包帯を取った。掌のひらには、一センチ方位で
羽を閉じたままの黒い鳥が横から見た図で描かれている。体は横を
向いているのに、頭はなぜかこちらに向いていて、力を使うとき、
目が僅かに赤く見える。まるで、なにかを訴えているかのように。
その鳥の目に少し恐怖を感じながら、平塚清汰の胸部に左手を当
てる。

そうすると僕は、平塚清汰の魂の中へ入ることができる。

人の魂の中は、一種の部屋のようになっているのだが、床はあつ
てもそこに仕切りはなく、内装は人によって違う。

飾り物が沢山浮いている魂もあるし、恐ろしく殺風景な魂もある。
有名な絵画や、思い出のフィルムが浮いている魂もあれば、本が積
みあがっている魂もある。

平塚清汰の魂は、思い出のフィルムが浮いていた。

どんな生き方をしてきたのか気になって、そっとフィルムに触れ

てみる。

様々なフィルムが同時に自動再生された。幼少時期、児童時期、学生、成人、結婚式、子ども……。子どもがいたのか。子どもがいたのに病死か。かわいそ。

魂は仕切りがない分、心臓部に達することが難しい。だから本来は団体で行動するのだが、僕は人間の魂に入り込んだ瞬間にその心臓部に辿り着く能力を持つ。今も、その心臓部にいる。

心臓部の中心には、一輪、花が咲いている。

その花が、人間の気力であつたり、精神であつたり、命であつたりする。つまりは、人間の心だ。

これを摘み取ってしまえば、その人には心がないのと同じだ。

「青、か……」

花の色も個人で違う。一色で青といっても、きらきら輝いていた、そうでもなかったりと、結構複雑な色を持つ。

青色の花を持つ人というのは、誠実で、冷静沈着、恥ずかしがり屋で寂しがり。また、希望を持ち続け生きてきた人、らしい。詳しいことは、よく知らない。

僕は、ガラス細工のような花の茎を左手で折った。パキ、という音を立てながら、花はいとも簡単に折れてしまった。

ここから、僕の仕事は始まる。

花びらを一枚、右手で取った。それを空中に上げ、落ちてきた球体を掴む。第二の心臓だ。

第一の心臓は臓器として、第二の心臓は心の脈を打つ。どちらかが止まってしまえば、人間は死ぬ。僕らが操るのは、主に第二の心臓だ。これを取り出せ、操ることができるのは、僕たち放死者しかない。

そして左手を床につき、魔方陣を出す。その上に第二の心臓を乗せてやると、魔方陣はたちまち心臓に絡みつき、縛り上げてしまった。これで、この人間はこちらのリスト通りの時刻に死ぬ。

僕らは、人間の花を摘んでしまう代わりに、時限爆弾を仕掛ける

のだ。

僕は、摘み取った花を布に包^{くる}んでコートの内側のポケットにし
ま
いこみ、平塚清汰の魂から抜け出した。

第11話「人の持つ花」(後書き)

こんにちは。赤ボールペンです。

遅くなりましたが、この物語は全てがフィクションであり、人物、建物等は一切関係ありません。

また、死後の世界等も全て私の勝手な思想ですので、物語上の設定であると考えていただければと思います。

第12話「本日の仕事は終了です」

平塚清汰の魂から抜け出した僕は、平塚清汰にまだ息があることを確認した。

リストには、人物名、存在している場所、死因、死ぬ時刻までと細かく記されている。もし、僕が花を摘み取ってしまった時点で息絶えてしまっていたら、それは失敗だ。僅かながら、次元が歪む^{ゆが}人間界は、生まれる人、死んでいく人がいることで成り立っている。一日にいくつもの命が誕生し、また、いくつもの命が亡くなっていく。それを毎日行うことで、次元が崩れないよう保っているのだ。D・C・O・が書いたシナリオ通りに、人間は生きていく。僕ははその手伝いをする。

「おかえり、シドウ」

「うん」

リュウが声をかけてくる。

「ん」

「おう、お疲れ」

摘み取った青く光る花を、リュウに手渡すと、リュウは懷にそれをしまった。

それから先、僕らはいつも通り黙々と仕事をこなした。自分がしている仕事に疑問など感じない。次元が歪まないよう、調整をしているだけだ。

この仕事に対して疑問を持ってしまったとき、僕は負ける。感情を抱いてしまっただけは、必ず崩れる。だからこそ、淡々と与えられただけの仕事をこなしていくのだ。それが、僕の使命だと思っている。

僕がなぜD・C・O・に入れられたのかは分からない。死んだのに、ここに存在し続ける理由も分からない。どうしてこうなったのかも、分からない。だから今はこうしてがむしゃらに、働いている

ことしかできないのだ。

「つーぎーはー」

「23番道路」

「りょーかい」

なぜカリユウは、仕事をしているときは機嫌がいい。いや、いつ見ても機嫌はいいのだが、仕事をしているときは特に機嫌がいい。いまにも鼻歌を歌いながら歩きそうなくらい、機嫌がいいのだ。

僕は病院を出て、最後の仕事現場、23番道路に到着した。

長原光弘の仕事だ。

長原光弘22歳。事故死の予定。事故、事件をしかけるのも僕、放死者の仕事だ。

いつものように姿を消し、車が通っていることもお構いなしに道路の中心部へと進む。姿を消しているとき、斬られようが踏まれようが、痛くも痒くもない。血が出ることもない。だって、透明だから。

包帯を外し、集中力を高める。烏が、目を赤く光らせると同時に、その場に無数もの青白く光る魔方陣が出現した。

「……相変わらず、凄い威力だねえ」

リュウの声が聞こえるが、放っておこう。今は、集中しなければ。僕は、頭の中で長原光弘の情報を思い浮かべた。そして、

「時合^{しうご}」

呟くと、今まで大人しく静止していた魔方陣の盤が、ゆっくりと自転し始めた。

やがてその動きは止まり、一度強く光った後、魔方陣は消えてしまった。

「ふう」

小さく息を吐く。

「お疲れ。いやあ、何度見てもいいよね。ハラハラだよね」

「なんだよそれ」

こいつは、生きてるとき殺人犯かなんかだったのだろうか……。

「仕事終わったし、どつか寄ってく？」

リュウは未だ上機嫌だが、僕としては一刻も早く家に帰って寝たい。

「どうせ金は僕が払うんだろ。行くなら一人で行って帰って来い」

「ええ？ シドーの意地悪」

「ほっとけ」

適当にあしらっておこう。こっちは死神の考えられないほどの体力と気力を使い、疲れているのだ。

「じゃあ俺もかーえる」

「あ、そ」

「なんだよシドー、冷たいなあ」

「よく言われるよ」

いつも通りの会話を交わしながら、夜中の道を歩いた。これも、誰かが仕組んだシナリオなのかもしれないと思いながら。

登場人物紹介

ここでは、人物紹介をさせていただきます。

まだ名前だけで登場していない人物もいますが、後々出てきますので、先に紹介だけさせていただきます。

間宮 シドウ（まみや しどう）

17歳、男。身長165cm、体重56kg。

4月29日生まれでおうし座。血液型はA型らしく、D・C・O・に所属し、放死者として働いている。

数年前に交通事故で死亡しており、生まれ変わるはずだったが、生まれ変わる最中にD・C・O・に連れてこられた。現在は日本で高校生を装いつつ仕事をしている。（成績優秀である。）大変大人しく、人間の前では無表情なことが多い。左手にある烏の印を隠すために包帯をしている。また、生前の記憶を失っている。

兼倉 真（かねくら しん）

17歳、男。身長170cm、体重62kg。

1994年7月5日生まれでかに座。血液型はB型で、人間と悪魔のハーフである。

幼馴染の悠斗を頼り、テストでは素晴らしい成績を残している。テストでは。

弾けキャラでもなく、内気キャラでもなく、人を寄せ付けないキャラでもない。人懐っこいので人に言わせれば「付き合いやすい奴」。悠斗と行動することが多い。

自分に悪魔の血が流れているので、人間には見えない悪魔を見たり、気配を感じたりすることができる。自分に悪魔の血が流れることを、真は知っている。

佐藤 悠斗（さとう ゆうと）

17歳、男。身長162cm、体重49kg。

1994年11月24日生まれでいて座。血液型はO型で、普通の人間である。

真とは幼馴染の関係にあり、何事にも突っ走っていく勇気をもつ真に強い憧れを抱いている。

おっとりぼわわした性格で、怖い話が嫌い。男子も驚く美少女顔で、成績優秀な上に性格良好なことから、男女共に人気は高い。

リュウ（りゅう）

20歳、男。身長188cm、体重63kg。

誕生日、血液型、本名不詳。

シドウと行動を共にする死神。人間の肉体と魂を別離させるときには大きな鎌を使用する。主に電柱の上や空気中で浮遊しているが、人間に姿は見えない。

性格はサバサバしており、喜怒哀楽が分かりやすい。好物はタイヤキ。

名乃代 慶次（なのしろ よしつぐ）

31歳、男。身長175cm、体重69kg。

1980年12月11生まれのいて座。血液型はAB型で、かみにきゆう上二級の被魔師の称号を持つ。

父親が被魔師だったことから、自分もその道に進んだ。19歳のときに父親が真を連れて帰ってきて、弟というより息子のように可愛がっている。

真に対悪魔用の毒薬や武器を与えている。一見普通のオッサンだが、被魔師としての腕は凄い。武器は主に銃を使用するが、場合により刀剣や召喚、詠唱を使用する。両きき。普段は仕事に追われて被魔師の本部の仮眠室で生活しており、常に袴姿。

日向葵から「のし」と呼ばれている。

日向 葵（ひなた あおい）

30歳、女。身長168cm、体重――。

1981年8月27日生まれのおとめ座。血液型はB型で、慶次と同じく上二級の称号を持つ祓魔師。

慶次の酒友。慶次からはヒマワリと呼ばれる。

酒に強く、酔いつぶれたためしがない。むしろ元気になる。避けはこの人専用の栄養剤である。

使用武器は刀剣。理由は「かつこいいから」ということと、「ブンブン振り回すとストレス発散になるから」とのこと。また、剣士だけでなく、召喚士の称号も取得しており、特にスノーマンの妖精を可愛がって、よく遊んでいる。

レイラ・クロスフィール（れいら・くろすふいーる）

外見19歳、女。（実年齢、約1500歳） 身長158cm、体重27kg。

誕生日血液型不明。

真を迎えに魔界からやってきた美少女悪魔。上流階級者であり、人間に憑依せずとも人間界で人間らしき姿で過ごすことができる。

真の父に仕えており、その真の父の言いつけで、真を迎えにきた。

物理攻撃を得意とするが、魔法攻撃の腕もなかなかのもの。

鮭鮫 怜羅（さざめ れいら）

17歳設定、女。身長158cm、体重42kg。

1994年1月25日生まれのみずがめ座設定。

レイラ・クロスフィールの人間バージョン。真に一目惚れし、人間に変装して真のクラスに編入してきた。苗字は彼女の溺愛する悪魔からとったもの。その悪魔はスノーマンの妖精と違い、溺愛できるような容姿ではないらしい。

バルディガ・クロスフィール（ばるでいが・くろすふいーる）

外見22歳、男。身長190cm、体重45kg。

レイラの兄であり、悪魔である。レイラからはバルドと呼ばれている。

妹を非常に可愛がっており、レイラは少し嫌がっている模様。

鈴嶺 要（すずみね かなめ）

22歳、女。身長161cm、体重30kg。

リユウのお友達であり、死神である。D・C・O．???番隊隊長。

D・C・O．について。

Death Control Organization（デス・コントロール・オーガネイション）の略。直訳すると死を制する組織。

人間界の次元が歪まないように誰を誕生させ、誰を死亡させるか決めている。それを番隊にリストとして配り、人に死を与えさせている。放死者と死神が所属しており、番隊制度を設けている。主に死神一人、放死者一人のペアが4つ集まり、1つの番隊としている。日本支部には????番隊まであり、シドウの所属する???番隊は、滅多に集まりにも出席せず、姿を現さないのので「幻の???番隊」と呼ばれている。番隊には隊長、副隊長がそれぞれ1人ずつ存在する。死神と放死者の区別の仕方はコートの色で、死神は灰色、放死者は黒色をしている。

放死者とは、主に死を与える役割をする。

人の魂の中に存在する花を摘み取り、それを死神に渡すのが役目。

また、事故や事件を仕組むのも放死者の仕事である。

死神とは、主に人間の肉体と魂を別離する役をする。

放死者の仕事が終わり、時が来て人間が息を引き取った後、魂を狩るのが役目。摘み取った花と魂を本部に送ることも仕事である。放死者より優れており、姿を消しても疲労感はないらしい。放死者よりD・C・O・の知識は豊富。

魔界について。

人間界と対なる世界。人間界と魔界が存在することでこの世界が成り立っているといわれる。

主に悪魔が住んでいるが、人間の魂が迷い込むこともあるとか、ないとか。

人間が魔界に行くことはできないが、悪魔が人間界に姿を現すことはあり、物に憑依したり、人間に化けたりしているらしい。

悪魔には下流階級悪魔と上流階級悪魔がいる。その血は遺伝するということ、上流階級悪魔から下流階級悪魔が生まれることもなければ、その逆もありえない。

下流階級悪魔は全体の悪魔の9割を占め、物に憑依しないと人間界では生きていけない。魔界にいるときもその姿を持ち込むため、様々な種類の悪魔がいる。

反対に上流階級悪魔は一握りの存在であり、俗にいうお嬢様、お坊ちゃまである。

上流階級悪魔は人間界で人間と変わりなく人間のように生きることが可能である。人間界に現れる理由は、人間と契約を交わし、契約が完了したとき、その人間の魂を食べるため。

魔界での上流階級悪魔と下流階級悪魔の区別の仕方は、姿である。下流階級悪魔は人間の姿になれないが、上流階級悪魔は常に人間の姿で存在する。

被魔師について。

被魔師とは、人間界にきた悪魔を被う人。慶次らが所属するのは被魔師団という組織で、位の制度がある。慶次ら上二級者はかなりの凄腕。一番下は訓練生、一番上はS級と呼ばれる。

主に一人が使うことのできる武器は一つだが、全て取得することも可能。だが、相当な才能がない限り、それは難しいといわれている。

登場人物紹介（後書き）

長くなつてしまい、申し訳ありません。見苦しいかと思いますが、そこは目を瞑っていただけたらと思います。

今のところの主な登場人物は上記のものとなっておりますが、場合により登場しなかったり、登場人物が増えたりと変更する可能性もありますのでお気をつけ下さい。

また、D・C・Oの説明なども追々していけたらと思いますので、よろしく願います。

第13話「交通事故を目の前に」

「ん？」

学校からの帰り、悠斗と二人、いつもの道を歩いているところだった。

「なにがあつたんだろうね」

と悠斗。その言葉が何を指しているのか、流石の俺でも分かった。目の前には人ばかり。遠くからだんだんと近づいてくる救急車の音。場所は、交差点。

「ちよつと行つてみるか」

「うん」

俺と悠斗は、人ごみを掻き分け、背伸びして中心部を覗いた。

「うわ……」

それしか、言いようがなかった。

横たわり、いくら声をかけても目を覚まそうとしない血まみれの男性。交通事故だ。

「かわいそうにね」

「まだ若いのにね」

「トラックの信号無視だそうよ」

おばさんたちの話し声が聞こえる。

「交通事故、か……」

呟いてみて、後悔した。今まで押さえつけていた過去の思い出が、ふと、頭を過ぎったからだ。

もう、何年前のことになるだろう。十年くらい前だろうか。俺は交通事故に遭ったことがある。道路に転がり出たボールを拾いに行こうとして、相手の原付バイクが俺を避けようと右に切った。そして、対向車に……。

「真？」

「えっ……」

「どうしたの？」

悠斗に声をかけられ、はっと我に返った。

「あ、いや、なんでもないよ」

「そう？　じゃ、帰ろ」

悠斗は柔らかい笑顔を見せた。

「ああ、そうだな」

こんなとこにいても、気分が晴れるわけでもない。逆に、嫌な思
い出が甦るだけだ。俺たちは、その場から立ち去った。

「思い、出してたの？」

長く続いた沈黙を破り、話しを持ちかけたのは、やはり悠斗のほ
うだった。

「何が？」

問い返すと、

「事故のこと」

と返された。何も言わず黙っていると、

「もう忘れなよ。確かに、真も悪かったかもしれないけどさ」

悠斗なりの優しい言葉が、俺の心にぐさりと刺さる。丸みを帯び
てなくてはいけない言葉が、鋭利な角に感じる。

「過去にばかり囚われてちゃ、これから生きていけない」

分かってる。分かってるよ。だから今まで封印してきたけれど、

ここ最近、何もなくても思い出してしまうことがある。理由は、よ
く分からないが。

「じゃ、僕こっちだから」

悠斗が指で右を指しながら言った。

「あ、ああ」

「あまり考えすぎるなよ」

「分かってる」

少し、口角を上げてみる。けれども、何も心を感じる重さに変わ
りはなかった。たぶん、笑う角に福来るっていうのは言葉だけだな。
ビュッと、風が吹いた。

「う、さぶっ」

もう春だというのに、なぜこんな風が吹いたのだろう。これが漫画やアニメならば、誰かが通っていったという可能性も考えられるだろうが、あくまでここは普通の人間界だ。そんなことが起きるわけがない。

「異常気象だな」

なんか違う気がするけど、細かいことは気にしない。だって、俺B型だしな。

「関係ないか」

溜息混じりに呟いたが、もうそこには言葉を返してくれる人などいなかった。

『見える、心の闇が。聞こえる、心の叫びが……』
「！」

突然聞こえた声に驚き、振り返る。ブレザーに忍ばせてあったサバイバルナイフを手にして。

『罪、生きてること。罪、生まれたこと……』

悪魔だ。人間の心に寄生する、典型的な悪魔だ。

『ヒヤハハハハハハハ』

「黙れ！！」

悪魔にサバイバルナイフを突き立てる。周りには、黒い液体が飛び散った。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

乾いた唇を舐め、唾を飲み込む。

『ワカ……サ、マ……』

悪魔は、そう言い残しながら姿を消した。飛び散ったはずの黒い液体も、もうそこにはなくなっていた。

突然のことに俺は動揺し、走って走って、家に飛び入った。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

収まらない心拍数、吹き出る汗、震えが止まらず何も握れそうにない手。

「おう、おかえり…… っ てどうした」

「お、オッサン……」

よかった。まだオッサンは家に滞在中であつた。オッサンの姿を確認して、俺は久々の全力疾走に疲れ果て、その場で意識を失つた。

第14話「温くなったココア」

「んあ……」

目が覚めると、見えた景色は天井だった。

「ここ、は……」

玄関の。

「おう、起きたか」

「オッサン……」

目に入った人物は一人のオッサン。相変わらずの袴姿で手にマグカップを持っている。

「飲めよ。暖まるからさ」

二カッと笑い、マグカップを差し出してきた。中にはココアが入っていて、あの甘い独特な匂いがどことなく俺を落ち着かせた。温かいココアを一口含み、喉を湿らせた。

「俺、なんでここに」

「お前が帰って早々ここでぶっ倒れたんだろ」

「ああ……」

そうだった。そういえば、帰宅してからの記憶がこれっぽっちもない。

俺が履いていたはずの靴は脱がされており、肩からかけていたはずの鞆は姿を消し、着ていなかったはずの毛布を被せられていた。オッサンが、運んでくれたのだろうか。だとしたらありがたいが、どうせならぶっ倒れていた俺をどこかに移動してほしかった。

「とりあえずそこじゃなんだからさ、上がろうぜ」

「うん」

まだ微妙に思い体をゆっくり起こし、立ち上がった。

「んで、一体どうしたんだよ。倒れるくらいまで走って帰ってきて」
椅子に腰をかけたオッサンが、煙草に火をつけながら言った。

「……」

どう状況を説明すればいいか分からず黙っていると、

「悪魔か？」

ふいに優しい声で問われた。俺はゆっくり首を縦に動かした。

「俺、俺……」

話したいことは、山ほどある。けど、要点を絞って言えたのは、

「俺、悪魔、殺した……」

それだけだった。

オッサンは驚きを隠せないように、煙草からこぼれ落ちた灰が、テーブルの上にはらはらと散った。

「真……」

「怖かった……聞こえる声が、見える姿が」

そのまま俺を、引き込んでしまいそうで……。

「ど、どうしよう、俺、悪魔が復讐なんか、しにきたら……！」

「落ち着け真！」

大声で怒鳴られて、やっと自分だけの世界から抜け出せた。

「……そっか、殺しちまったか」

テーブルの上に落ちた灰を、オッサンは掻き集めて灰皿の中に入れた。

「身を守るためには、止む終えないことだが……」

そう言うオッサンの顔を、俺は見る事ができなかった。たとえ相手が悪魔であろうと、殺してしまったという事実には変わらない。

「それで、聞こえた声って？」

オッサンは、煙草を銜え直しながら言った。

「あまり、覚えてない」

「そっか」

ふう、という空気の音と共に、オッサンの口から白い煙が放たれた。

「でも、俺のこと、若様、って……」

「なっ」

「え？」

俺の発言に、オッサンは体を振るわせた。そして、小さな舌打ちの音が聞こえた後、^{のち}

「真の存在は知られたわけか……」

眉間にしわを寄せつつ、ボソツと呟いた。

「真」

「うん？」

「これからは今まで以上に気いつけとけ。んで、見える悪魔の種類も、数も、今まで以上に多くなるだろう」

「は？」

煙草を右手に持ち、灰皿で火を消すと、オッサンは立ち上がり、
「今日ので真が生きていることも、居場所も知られた。こうしちゃ
いられねえ。俺は本部へ戻るぜ」

と、傍においていた刀を手を取った。

「何かあつたら連絡しろ」

「あ、うん」

俺にはまだ、オッサンの言っている言葉の意味が分からなかった。
俺は無知で、無力で、ガキだから、自分が危険にさらされているな
ど、分かるはずもなかった。

「なんだよ」

一人になってしまった部屋。もう冷めてしまい、^{ぬる}温くなってしまう
ったココアを、俺は飲み干した。

「甘いな……」

第15話「死神の仕事」

「……う、さぶっ」

街中を歩きかう人々の誰もが口に出した。そう口にするのは当たり前だった。先ほど、突風が吹いたのだから。もう春、4月が終わろうとしているのに、まだ人間たちは言っているのだ。

「今日は一段と寒いわね……」

と。今現在、違うところで交通事故が起き、人が一人、死にそうになっているのも知らずに、人間たちはのん気に「寒い」などと口に出しているのだ。

「暇なもんだね、人間は。こっちは仕事で忙しいうのに」

一人の男は不満げな顔をしながら言った。勿論、独り言である。周りに人などいない。

「おっと、こつちじゃないか」

浮かせた体を右に切り、直角に曲がる。人間が見れば、異常だと思っただろう。しかし、彼は人間ではないし、人間にも見られることのない存在だ。今、忙しそうに仕事に向かっている男性は、

「あー、10秒以内に間に合うかなあ」

一応、死神なのである。

今人間の魂を狩りに行っている最中で、その相手の人間の名前は長原光弘。22歳の若造だ。

長原光弘は、D・C・Oから今日の午後7時23分に交通事故死と設定されている。いくら神とはいえ、最高幹部であるD・C・Oに逆らうことは許されないし、逆らおうとはしない。D・C・Oがこうだと言えば、従うだけである。

「きゅーびゅう」

残り10秒をカウントダウンしているようだ。

「はーち」

人間に姿は見えないため、突然吹いてきた風のようにしか思われ

ていないだろう。死神は、そのくらいスピードを出し、病院に向かって全力疾走（浮遊？）している。

「ろーく」

彼が道を行く度に、木々がカサカサと音を立てる。

「ごーお」

どこからか取り出した鎌を右手に、

「よんさんにいいち！」

窓ガラスをすり抜け、長原光弘の下へと辿り着いた。

「死神って大変だね。時間に正確じゃないといけないんだから」
クスリと笑い、長原光弘の顔へと近づく。遺族が泣きじゃくっている姿は、今の彼には見えない。

「回収させてもらおうか」

微笑みの絶えない彼は、懷から布を取り出した。中身は、昨日同業者である放死者から預かった長原光弘の花である。ガラス細工のようで、力を加えれば今にも折れそうである。

その花を、長原光弘の腹部の上に置き、鎌を構え、

「……」

その花に目掛け、鎌を振り下ろす。何でも切れるという死神の鎌だが、花だけはすり抜けてしまう。花が切れてしまつては、仕事にならないからだ。

鎌を振り下ろしたとき、人間は一瞬、体を反応させたが、それ以上はなにもなかった。人間が反応するのも当たり前だ。今まで一つになっていた肉体と魂を引き離されるのだから。

「んー……」

トントン、と花をつつく。花は、鎌で触れる前とは違う、何かが詰まったような音がした。

「よし」

その音の正体は、長原光弘の魂である。

花は、第二の心臓とも言われるほど人間にとって大切な部位だ。そして、第一の心臓とは違い、放死者が切り離し、死神が持ち運ぶ

ことができる。肉体から切り離されて空っぽになった花は、魂を入れる器としては持ってこいなのだ。

「仕事完了」

死神は、満足げな顔を見せ、大きな鎌を片付けた。

「帰る前にもう一仕事しなきゃな」

姿を消したまま窓をすり抜け、また風に成り済まし、今日回収した花を手に、死神は一軒の家に足を運んだ。

「ぴんぽーん」

電子音を口に出しながら、相手が出てくるのを待つ。

「はいはい」

中から出てきたのは、彼と同じ色のコートを着た、若い女性だった。

「あら、リュウ」

「うつつす」

「どうしたの？」

女性は、つつかけを履いて門の所まで立ち寄ってきた。勿論、人間にこのやり取りは見えない。

「仕事終わったからさ。はい、今日の分」

リュウは六本の花を包んだ布を、彼女に差し出した。

「また私に押し付けるつもり？」

「お願い要ちゃ〜ん」

「もう、リュウに言われたら引けないわね。いいわ、頼まれたげる」
彼女は花を受け取った。

「ありがとー、要ちゃん」

「あんたも総会とかちゃんと出なさいよね」
注意を添えると、

「やだよ。みんなピリピリしちゃってさ」
と口を尖らせた。

「ま、そうだよな。だってみんな」
彼女は悲しそうに、

「死んじやってるから」

と呟いた。

「やりたいことやれないと、どうしてもね」

苦笑いをする彼女に対し彼は、

「まーね。じゃ、頼んだよ」

と笑顔を返した。女性はい、ああ、うん。と言って、彼を見送った。もう、月は昇り、星は光っていた。当たり前だ。もう、夜だから。死んじやってるから、かあ」

呟いてみたが、その言葉にそれほどの意味はなかった。彼にとっては、何かを思いつめた重い一言だったわけでもない。ただ、彼女がいった言葉だから、リピートしてみたただだった。

街中に行く人は、もう寒いとは言わなかった。それは、彼がスピードを出して飛んでいないからなのか、世の中の一時的な変化を感じなくなったからなのか、それは誰にも分かることのないことだった。

第16話「今日の夕食はおでん」

夕飯を準備しながら、間宮シドウは同居人の帰りを待っていた。同居人とは言うまでもない、死神のリユウのことである。

今日の献立は、おでんだ。本格的にやろうとすれば時間がかかるのだろうが、素人が晩飯を作る分には、出汁に具材を切つて投入し、煮こめばできるという簡単な料理なため、シドウは今日の献立におでんを選んだ。

リユウに炊事を頼むと偏った食事になるため、台所はシドウが管理している。

いくら死者だといつても、腹は減るもので、朝食、昼食、夕食は欠かせない。特に朝を抜いてしまうと、非常に辛いものである。

シドウは小皿に汁を入れ、出汁を口に含んだ。

「……うまい」

我ながらいい出来だ。おでんのスープの素、たまには頼ってみるのもありか。

いつもなら、少し手のかけた料理を作るのだが、今日は時間がなかった。

「あの鬼教師……」

数学の教師がシドウに居残りを命じたのである。理由は他でもない、授業中の居眠りのせいだ。

シドウは授業中、ほとんどを寝て過ごしている。授業中の人間の様子には全くもって興味はない。もうここ十年ほど17歳をやり過ぎ、高校生活をやらされてきたのだ。何が「華の高校生活」だ。飽きるにも程がある。

「あー」

アスパラのベーコン巻きが食べたくなってきた。明日くらいは授業をちゃんと受けて、アスパラのベーコン巻き作ろう。

「にしてもリユウはまだか？」

時計を見ると、もう7時45分。今日の仕事は7時23分だと言っていた。死神は時間^{あいづ}に正確だし、仕事の後は寄り道をしないから、もう帰ってきてもおかしくはないのだが。

まあいい、準備を始めよう。

シドウは、おでんの鍋を持ち、テーブルの上へと置いた。そして皿に箸にと慣れた手つきで準備を進める。そのとき、

「ただいま」

陽気な声が玄関から聞こえた。トストスというスリッパを少し引きずるような音が聞こえた後、ドアが開いた。

「ただいまあ、シドー」

「ぬあっ！」

「ぎゅー」

シドウの背後へと詰め寄ったリュウが、シドウを抱きしめた。

「は、離せリュウ！」

「やだあ」

シドウがもぐくのと反対に、リュウはシドウを抱きしめる力を強めた。

「なっ！」

「遅くなつて悪いな、シドー」

「いいから離せ。ガキじゃないんだからっ」

結局、シドウが無理矢理リュウの腕を振り払い、リュウは口を尖らせた。

「拗^すねんなよ」

「だってシドーが冷たい……」

「だー！ー！」

「あ、今日おでん？」

「はあ……」

まったく、リュウとは長年一緒に過ごしているが、未だに喜怒哀楽がコロコロ変わるスピードにはついていけない。

「うまい！」

シドウのおでんに舌鼓を打つリュウ。

「いただきますくらい言えよ」

「言ったもん」

「ああ、そうかよ」

そうは言いつつも、シドウはリュウの笑顔が見られることに喜びを感じているようだ。

自分の作った料理に、これほどまで喜ばれると、また頑張ろうという気になれるのだから凄いものだ。

「今日遅かったな」

それとなく、帰宅時刻が遅いことを指摘してみると、

「ああ、他の死神がなかなか見つからなくてさ」

「ふうん」

「結局、要ちゃんの家に行ってきた」

「え」

シドウは箸を落とした。

「あ、シドー汚い」

「お前に言われたくないよ」

あしらいながら、箸を洗いに行く。

「要ちゃん、か」

すずみねがなめ

鈴嶺要。リュウの友達であり、死神であり、D・C・O・日本支部??? 番隊隊長。

今あの人たちは、違うところで働いているものと思っていた。なにしろ日本に部隊が14しかないものだから、本来なら2つ以上の部隊が同じ地区に集まって生活しているなど、有り得ることのない話だ。なぜ、ここにいるのだろうか……。

「ま、いつか」

在りもしないことを想像しながら生きるのは苦しい。余計なことは考えずに生きたい主義だ。気にしないでおこつ。

心配せずとも、D・C・O・は頭のいい組織だ。その辺もきつと、計算済みでの命令であろう。

「シドー、おかわり」

テーブルからシドウを呼ぶ声がする。

「自分で取れよ」

とは言うものの、取ってあげる優しいシドウであった。

口では嫌だと言いつつも、事を為^なしてしま^なうのがシドウである。

「明日はアスパラのベーコン巻きな」

「ええ？ 俺あれ嫌い」

「好き嫌いするな。ガキじゃあるまいし」

「えー」

「絶対アスパラだからな」

なにがなんでもアスパラで、なにがなんでもベーコン巻きを食べるのだ。

心に固く決意をしたはずだったが、次の日の夕食に出てきたのは、再びおでんだったとか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0026y/>

放死者

2011年12月20日22時49分発行